



TITLE:

禮忠簡と徐宗簡について：平中氏の 算賦申告書説の再検討

AUTHOR(S):

永田, 英正

CITATION:

永田, 英正. 禮忠簡と徐宗簡について：平中氏の算賦申告書説の再検討.
東洋史研究 1969, 28(2-3): 140-161

ISSUE DATE:

1969-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152798>

RIGHT:

禮忠簡と徐宗簡について

——平中氏の算賦申告書説の再検討——

永 田 英 正

一

漢代史の研究は居延漢簡の発見によって大きな飛躍をとげた。一九三〇年、西北科學考察團が中國西北邊境のカラホト、エチナ河流域一帯で發見した一萬數百點にのぼる、いわゆる居延漢簡は、漢代の邊塞屯戍の文書記録が中心であり、したがって特に漢代の兵制軍事面での研究に著しい進展をもたらした。しかし新資料の價值は單にそのみに止まらず、廣く政治・社會・經濟的研究面においても活用され、今日まで多くの斬新な研究を生んだ。中でも平中荅次氏の「居延漢簡と漢代の財産稅」（立命館大學人文科學研究所紀要第一號、一九五三。同『中國古代の田制と稅法』所收）は簡番號三七・三五の候長禮忠の簡札（以下禮忠簡と呼ぶ）と簡番號二四・一の際長徐宗の簡札（以下徐宗簡と呼ぶ）とをもつて財産稅・人頭稅の申告書と斷定し、漢代の財産稅制度全般にわたって論じた雄篇である。この研究により漢代の賦稅制度、就中財産稅の問題は大いに明らかにされ、以後の研究に大きな影響を與えた。その點氏の功績は多大なものがある。しかしながらそこで取り上げられた禮忠簡・徐宗簡がいずれも財産稅（貲算）・人頭稅（口算）を含む算賦申告のための文書であるとする見解には、なお問題があるように思われる。本論は、特にその點に焦點をしぼり、併せて算賦制度について検討してみたい。

平中氏の引用にかかる禮忠簡（簡1）と徐宗簡（簡2）とは、次のようなものである。

簡1 候長麟得廣昌里公乘禮忠年卅

小奴二人直三萬 用馬五匹直二萬 宅一區萬
大婢一人二萬 牛車二兩直四千 田五頃五萬
軋車一乘直萬 服牛二十六千 ●凡警直十五萬

（三七・三五） 圖一三七 二八二〇
活四五五

簡2 二堆隊長居延西道里公乘徐宗年五十

妻妻 宅一區直三千 妻一人
子男一人 田五十畝直五千 子男二人
男同產二人 用牛二直五千 子女二人
女同產二人 男同產二人
女同產二人

（二四・一B） 圖二二〇 四〇八五
活四六三 甲一八一B^⑧

ところで、この禮忠簡と徐宗簡を最初に問題にしたのは陳槃氏であった。陳氏は「由漢簡中之軍吏名籍說起」^⑧においてこの兩簡を取り上げ、これらをいずれも軍吏の戶籍とみなし、この戶籍こそは軍吏の「集簿」（計簿）の一部をなすもので、そこに資産や家族を記しているのは、戶籍が算賦（人頭税）や財産税徴收の基礎となったからであるとする。但、人頭税を徴收するためには年令の記載を必要とするが、右の簡に妻子の年令を記していないのは、軍吏の戶籍にもその用途によって幾種類があり、この場合は年令に重點がおかれず、便宜これを省略したものであらうとした。

これに對して平中氏は、前記「居延漢簡と漢代の財産税」の中で反論を加え、戶籍には家長および家族の本籍・爵位・氏名・性別・年令・形狀・續柄等が記されている筈であるが、前記の漢簡にこれらを記していないことはそれが戶籍でな

かったことを示すものであるとして陳氏の戸籍説をしりぞけた。そして漢代には貲算（財産税）・口算（人頭税）・緡算・車算・船算・畜算など錢納の税すなわち算賦が施行されたが、これらはすべて納税者がそれぞれの戸に屬する資産や口數など課税對象物の明細を申告することになっていた。この兩簡は、まさにその申告書であつたとする。但、徐宗の簡札に家口を記載して上段に妻および子男一人・男同產二人・女同產二人を擧げているのは、年齢十五歳以上の「口算」の對象となるべき者を示したものであり、下段にその外に子男一人・子女二人を加えて掲げているのは、十四歳以下の者で「口錢」の對象となるべきものを併せて示したのであらうとする。これに對して禮忠の簡札に戸口が記載されていないのは、禮忠は候長すなわち百石の有秩の軍吏で一般の民に課せられる口算を負擔せず、また家族も同様に口算が免除されていたからであらうとしている。

陳氏の場合は、禮忠簡・徐宗簡の解釋から始つて漢代の戸籍制度、上計制度、資産登錄制度、比戸占籍制度、軋車課税制度、奴婢自由賣買制度などについて論じたものであり、一方の平中氏も陳氏批判から出發して名籍の意味、上計簿と四時簿の區別、自占と案比の相違、王莽の貢法の本質、軋車・奴婢の評價額など、さらには財産税制を中心に人頭税を含む漢代算賦制度全般にわたつて論及されたものである。このように兩論文いずれも廣範圍な内容をもつものであるが、ただそれぞれの論據となつた禮忠簡・徐宗簡の解釋についてのみえは、要旨はおよそ以上に紹介したとおりである。

ところで、この平中氏の解釋については、その後にくつかの批判が出されている。先ず最初は米田賢次郎氏である。氏は「居延漢簡とその研究成果」において、平中氏の陳氏に對する批判は是認しながらも、平中氏のいわゆる算賦のための申告書とすることには、尙問題があるのではないかとする。その理由として、たとえば財産の申告書が見されている地點といへば民治に關係ある所、少くとも都尉以上の治所でなくてはならぬが、果して簡番號二四と三七の兩地點が居延或は張掖の地であつたであらうか。兩簡を同一性質のものとすれば、禮忠の簡にも同じく妻子同產が書かれている筈ではなからうか。また徐宗の簡に「口賦」（平中氏のいわゆる口算）を納める者と「口賦・口錢」を納める者との中間

に財産を話している記述の順序にも疑問がある。また算賦に關係あるのは男女の性別でなく年齢であるが、その記載がないのも理由がわからぬという。米田氏は主として以上のような點をあげて平中氏の申告書説にも遽に賛成できないとし、陳氏の言うように軍吏の帳簿の中には候長以下、兵士達の身上調査簿や財産を記した名簿があつてもよいではないかとしている。後述するように米田氏の批判は核心をついており、傾聴すべきものである。また戸口調査の面から批判したものに佐藤武敏氏がある。氏は「漢代の戸口調査」において「口算」・「口錢」など人頭税の賦課は戸口調査と密接な關係があつたとする觀點から、平中氏のように「口算」・「口錢」の調査が戸口調査とは別に財産税の調査と同時に行われたというのは賛成し難いとしている。簡札の性格については特にふれていないが、戸口調査という具體的制度面から平中説をチェックするものである。また宇都宮清吉氏も「僮約研究」の中で兩簡を引用しているが、徐宗簡については記載はすこぶる疑問が多いとしながらも、やはり一種の財産簿だろうとしている。これに對して徐宗簡を否定する立場をとるのが楠山修作氏の「漢代の賦の意味について——平中說批判——」^⑦で、氏は主として算賦課徴の對象および軍賦の問題から批判し、徐宗の簡札は平中氏の説のような財産の調査記録でもなく、また徴税のための記載でもないとする。詳しくは後にゆずるが、氏の軍賦の解釋は傾聴すべきである。

禮忠簡・徐宗簡を引用した論文は他にもあるが、兩簡についての陳氏および平中氏の提起した問題にふれたものは、私の知るかぎり以上のものである。

ところで、ここに一つ注意しなければならないことがある。それは陳氏をはじめ、平中氏以下すべて禮忠簡・徐宗簡を勞榦氏の釋文にしたがつて讀んでいることである。周知のように居延漢簡が発見されてから公刊に至るまでにはかなりの歳月を要し、始めて公刊されたのは発見から十三年後の一九四三年、勞榦氏による『居延漢簡考釋』（油印本）であつた。^⑧この考釋は一九四九年には活字本となつて多くの利用に供されるようになったが、肝心の圖版は更におくれ、ようやく一九五七年に至り、中央研究院歷史語言研究所から『居延漢簡圖版之部』として出版されるに至つた。居延漢簡の発見

以來、實に二十七年後にしてはじめて我々はその全貌を知ったのである。したがって從來の諸研究が多く勞氏の釋文を據りどころにしたのは、實際上、止むを得ないところであった。しかし今日、幸にも圖版を手にすることができた以上、われわれは禮忠簡・徐宗簡の問題を、先ず圖版に従って勞氏の釋文を點検することから出發しなければならぬ。

三

今、圖版並びにそれによって訂正した釋文を示すと、次の通りである。先ず禮忠簡は、

侯長饒得廣昌里公乘禮忠年卅

小奴二人直三萬
大婢一人二萬
軺車二乘直萬
服牛二六千

用馬五匹直二萬
宅一區萬
田五頃五萬
●凡嘗直十五萬

簡1' 侯長饒得廣昌里公乘禮忠年卅

小奴二人直三萬 用馬五匹直二萬 宅一區萬
大婢一人二萬 牛車二兩直四千 田五頃五萬
軺車二乘直萬 服牛二六千 ●凡嘗直十五萬

となる。簡1'で「軺車一乘」とあるのは「二乘」の誤りである。かつて陳槃氏は前記論文の中で武帝の軺車に對する課税措置にふれ、軺車一乘の萬錢は住宅なら一區、田なら一頃、牛車なら五兩、馬ならば二匹半に相當する價格であり、當時では奢侈品とみなされていたために課税の對象となったものであるとした。軺車とは普通一頭立の小さな馬車をいい、それは漢代畫像石の中でも常見するところで、特に豪華な車というものではない。^⑨漢代、馬車は確に貴重品であつたに違いないが、それにしても一乘萬錢は高價にすぎる。これは勞氏の誤釋にもとづく誤解であつて、一乘五千錢が相應の價格である。

つぎに、徐宗簡であるが、同様に圖版とそれにしたがって訂正した釋文を掲げると次の通りである。



簡2* 三塙隊長居延西道里公乗徐宗五十

徐宗年五十

妻

宅一區直三千

妻

妻一人

子男一人

田五十畝直五千

男子一人

子男二人

男同産二人

用牛二直五千

子女二人

女同産二人

男同産二人

女同産二人

二塙隊長は三塙隊長の誤りである。ところでこの徐宗簡の釋文を簡2のそれと比較すると、簡2の方が第二段に「徐宗年五十」第五段に「妻」「男子一人」と記載が多いことに氣づかれるであらう。しかし圖版からも知られるように、第二段の「徐宗年五十」は明らかに第一段の徐宗の姓名と年齢のところを習字したものであり、また簡札の左上半部には「□□□二十石」とか「不入」といった文字が判讀される。なおこの徐宗簡には裏面(二四・一A)があり、そこで中央上部に「三塙隊長居延西道里公乗徐宗年五十」と淨書するほか、簡一面に「三塙隊長」「長丞」「伏地再拜」「足下母恙」等々の手習いの文字が判讀される。したがって徐宗簡そのものは習書、すなわち手習いの類であって、これが正式の文書でないことは明らかである。

このように徐宗簡は習書の簡札であり、したがってそれは正式の文書でないといえは簡単であるが、しかしそれにもかかわらず注意しなければならないことは、いったいここには何を書こうとしていたのか。もしもそれが完全であったならば、いったいどういう種類の文書であったのか、といった問題である。

いま徐宗簡を圖版で見ると、また明らかに別筆にかかると思われる「□□□二十石」「不入」などの文字を除き、その忠實なる釋文は簡2'にかかげたとおりである。この簡札は一九五九年に中國科學院考古研究所から出版された『居延漢簡甲編』の中に收録されているが、その釋文も簡2'と同じである。すなわち全體は六段に分けられる。いま便宜上、上から第一段とし、第一段から第六段までを各々A・B・C・D・E・Fで呼ぶことにする。既に述べたようにBの「徐宗年五十」がAの下半部の習書であることは一目瞭然であるが、かつて勞榘氏がこれを簡2のように釋し、BのほかにEの部分を除いて徐宗簡をACDFの四段からなる文書として解釋したのは、BのほかにEの部分をして本文書には關係のない不用のもの、すなわち習書もしくは書き損じたものと判斷したからに相違ない。ここでEの部分を書き損じたのはCの部分と對比していったものであり、書き損じとみるのはFの部分と對比した場合である。勞氏は恐らく後者の判斷に立つものと思われるが、いずれにしても勞氏が徐宗簡を簡2のように釋讀したのは、それなりの見識によるものであったといふことができる。だが果してそうであつたらうか。ここで大きな威力を發揮するのが圖版である。そこで改めて圖版を詳細に觀察するとき、先ず氣づくことは、AからDまでの部分とEFの部分とは墨色が異なるといふことである。すなわち前者は淡く、後者は明らかに濃い。このことについては勞氏もかつて注意を向けていたやうで、F段が別筆であるといふことで兩者を區別している。^⑩この場合上段とは別の手になるといふ意味での別筆であればそれはなお問題で、私見よりすれば、むしろ全體が同一人の手になるものであるが、墨色からして時間的な先後があり、EFの部分は後の筆になるものと判斷する。もしそうであるとすれば、ともに同じ後筆にかかるEとFとの關係を、EはFの書き損じで、Fのみが完全なものとみても、或はまたEのみがCの習書でFはそれと關りなく獨立した完全なものとみるにしても、いずれの場合においても落ち着きが惡く、今ひとつ説得力をもたない。この點については後にも觸れるが、原因はいずれもEとFとを分離してとらえ、Eを削除してFを生かそうとするところからきていることは明らかであらう。したがってここでは削除するにしろ、或はまたそのまま生かすにしろ、EとFとはセットとしてとらえることが必要である。私見よりす

ればEもFとともにCの部分に關する習書で、いずれもCの部分に見られる家族構成とその人數を適宜手習いしたものであり、削除すべきだと考える。そして更に言うならば、Bの「徐宗年五十」もE・Fと同時の筆ではなかったかと推測される。恐らく本來の徐宗簡は、それが全體として完全文書であるか否かは別として、簡2'からB・E・Fを削除した残りの部分A・C・Dから成り立っていたものであろう。すなわち

妻

宅一區直三千

簡2' 三塹隊長居延西道里公乘徐宗年五十

子男一人

田五十畝直五千

男同產二人

用牛二直五千

女同產二人

である。そして何らかの事情でこの簡が不要となり、手習いとして用いたものと考えられる。

四

以上、圖版にしたがつて從來の禮忠簡と徐宗簡の釋文を考訂した。そして禮忠簡は簡1'とするも、徐宗の簡2'は習書の簡札であつて、本來の姿は習書の部分を削除した簡2'となるべきことを述べてきた。しかしこれは同時に文書の性格からも併せて検討すべきである。そこで今後は簡1'と簡2'を以てそれぞれ禮忠簡、徐宗簡と名づけ、次にそれらがいかなる文書であつたかを考えてみたい。

先ず禮忠簡であるが、上段中央に「候長饒得廣昌里公乘禮忠年卅」と記す。候長とは邊境における監視所の長をいう。

漢代河西四郡の一つ張掖郡下の居延には民政機關である縣のほかに居延都尉府がおかれ、またエチナ河流域には別に肩水都尉府がおかれ、これを以て防衛の二大中心基地とし、それぞれに數個の候官を配し、候官の下には更に若干の候と賧とがおかれて匈奴の南侵を防ぐべくまもりを固めていた。監視所としての賧は三〇五名、候になると一〇名前後の戍卒で構

成され、その長をそれぞれ隊長・候長とよんでいた。¹²⁾ 禮忠の場合は單に候長とあるだけで候名はわからない。しかし簡札の出土地によって統轄關係は知ることができる。すなわち、原簡につけられた上下二つの整理番號のうち梱包番號である上番號によって出土地が示されるが、禮忠簡の上番號三七は地灣出土であり、¹³⁾ 地灣は當時の肩水候官所轄下の肩水候官のおかれた地に擬せられている。したがって禮忠は肩水候官所轄の某候の候長の職にあったことは間違いない。饒得廣昌里は張掖郡の饒得縣廣昌里で、禮忠の本籍地を指す。

簡3 肩水候官並山縣長公乘司馬成中勞二歲八月十四日能書會計治官民頗知律令武年卅二歲長七尺五寸饒得成漢里家去

官六百里 (一三・七)

圖三九 七九〇
活四三九甲一一四

これは司馬成の勞(勤務日數)を記したいわゆる伐閱の簡札であるが、これによると肩水候官と饒得縣との距離はおよそ六百漢里(約二四〇キロメートル)前後であったことが知られる。また公乘は爵位の名稱で下から數えて第八番目に當るが、民爵としては最高である。以上の禮忠簡の上段の部分は、禮忠の官職にはじまって本籍地・爵位・姓名・年齢を記したもので、當時のいわゆる名籍の體裁をとっている。ついで第二段目以下は、奴・婢・輜車・用馬・牛車・服牛・宅・田のそれぞれの數量と値段を記し、最下段末尾に「●凡誓直十五萬」として誓すなわち財産の總計額でしめくくっている。

ここに列擧された財産が禮忠のものであり、また現存のこの禮忠簡は幅一・一センチメートル、長さ二二センチメートルで標準簡の長さからすると約一センチメートル折損しているが、文書の記載の形式からいって完全なものであることは明らかであり、したがってこれが禮忠の財産の完全な明細記録であったことは疑いないところである。

つぎに徐宗簡であるが、禮忠簡と同様に中央上段に徐宗の官職と本籍地・爵位・姓名・年齢を記す。徐宗簡の上番號二四によって示される地點が破城子すなわち甲渠候官のあとであることから明らかなように、三墩縣とは居延都尉府下の甲渠候官所屬の縣である。¹⁴⁾ 本籍地は張掖郡下の居延縣西道里、爵位は禮忠と同じ公乘である。この隊長徐宗の名は他の簡札にも見られる。すなわち、

簡4 三塙際長徐宗 自言故霸胡亭長寧就舍錢二千三百卅四責不可得 (三・四) 圖五二七 八二六四
 なる自言爰書があり、同一上番號の 活五一七

簡5 □長徐宗 自言責故三泉亭長石延壽菱錢少二百八十數責不可得 (三・六) 圖五六八 九四三八
 も同一人とみてさしつかえなからう。其の他に 活五一八 甲三三

簡6 第八際長徐宗 傍陽書不鮮明 卒張田取馬矢不在署□ (二二四・一〇八) 圖四四九 七三二四
 小積薪一上俚頃 活二一九

簡7 以牒驗問久故時與獮道丞兒譚爲吏者際長徐宗知譚故爲甲渠候長未當以吏賊毆捶擊

(一三五・一〇、三二七・七) 圖二〇四 三九二四
 活五〇〇 甲七三四

とある徐宗も、いずれも破城子出土であり年代も近いところからして恐らく同一人とみて間違いなからう。⁵⁾

さて徐宗簡は、上段中央の徐宗の名稱の記載について、第二段に家族構成とその人数を記し、第三段において宅・田・用牛の數量と値段を記している。この簡は幅三・七センチメートル、長さ二二・三センチメートルと禮忠簡に較べて三倍の幅をもつ大きな簡札である。天地ともに完全であるが、一部損傷しており、またのちに習書になったという點からして、これが完全な文書として整ったものかどうかは断定できない。それにもかかわらず、記載の上で禮忠簡と比較した場合、最大の相違點は、徐宗簡には家族が記されていること、また財産を列舉したのちにその總額の記載を缺いていることの二點である。

ところで平中氏の禮忠簡・徐宗簡についての見解のあらましは既に述べたところであるが、今一度ここで詳しく引用してみると、先ず、「兩名の簡札にはそれぞれの者に屬する財産の品目・數量・價格が列記してあるから、それが財産の調査記録であったことは明らかである。また、このような調査記録の目的がそれらの財産への課税のためであったであろうことも容易に察せられるところである」とし、また徐宗簡に見える家族の記載については「これが陳氏の云うような戸籍

簿の類でないことはそれに氏名・年令などの記述が缺けていることから明らかであり、従って、これは別の目的の爲めの記録とみなすべきである。上記の財産記録が課税の爲めのものとすれば、これも恐らく同様の目的のものと認められる。すなわち、この家族員数の記載はおそらく人頭税に關係したものであらう」とされ、具體的には「上段に妻および子男一人・男同産二人・女同産二人を擧げているのは、恐らく年齢十五歳以上の「口算」の對象となるべき者を示したものであり、下段にその他に子男一人・子女二人を加えて掲げているのは、十四歳以下の者で「口錢」の對象となるべきものを并せて示したのであらう」とされた。また禮忠簡に戸口の記載を缺いている理由として「勞榦氏の『居延漢簡考釋』自序によれば候長は百石の有秩の軍吏で、あたかも郷の有秩の畜夫に比すべきものであった。従って、彼は一般の民に課せられるところの口算を負擔しなかつたわけであり、彼の戸口を擧げていないのも同様の理由によつて家族の口算が免除されていたからであらう」とし、そして同一の簡札の上に財産税と人頭税に關する事項が并記されているのは、「口算も貲算も共に「算」を單位とする課税法を採り「一算」の額を共通にしていた點において、かつまた互に「賦」たる性質を同じくしていた點において、何ら相違は無かつた」からで、したがつて「禮忠・徐宗の簡札はそれぞれの戸に屬する口や貲を列擧した戸別明細簿であり、それが算賦に關する帳簿（算簿）、若しくは申告書であつたであらうことはもはや説明を要しない」とされた。

以上の氏の見解を要約するならば、

- (一) 兩簡は財産税のための調査記録である。
- (二) 徐宗簡の家族の記載は人頭税のためのものである。
- (三) 禮忠簡に家族の記載がないのは彼の官職により人頭税が免除されたからである。
- (四) 財産税も人頭税も課税方法やその性格からいって算賦の中に含まれる。
- (五) したがつて兩簡は算賦の簿録（算簿）か申告書である。

ということになる。そこで以下、順を追って検討を加えてみたい。

先ず(一)兩簡が財産税の調査記録であつたとする點である。漢代に貲算とよばれる財産税が課徴されたことは平中氏が明らかにされたところであり、禮忠簡の場合は或はそうではないかと推測しうる。すなわち禮忠簡のように所有する財産名とその價格を並べ、最後にそれらの總額をあげてしめくくっている書式は、それなりに首尾一貫した完全なものともみるべきであり、かかる觀點からしても禮忠の簡札を以て財産税の調査記録とみることはいちおうは可能であらう。問題は徐宗の簡である。確に徐宗の簡札においても禮忠の簡札と同様に宅・田・用牛といった財産の品目・數量が記され、それぞれ價格が記入されている點、財産の調査のような感じをうける。しかし楠山修作氏の批判にもあるように、最後に「凡譬直……萬」と、その總計を記す書式をとっていないことは問題である。禮忠簡の例からいえば、徐宗簡は不完全文書ということになるかもしれないが、徐宗簡にはこのほかに家族構成とその人數が記載されているのであつて、これらの點を考慮すると、兩簡は同一性質の文書ではなく、書式を異にする別個の文書であつたとみることも、また可能であらう。

そこで次に(二)家族の記載が人頭税のためのものであつたかどうかという問題である。周知のように漢代には算賦として口賦(口錢)とよばれる人頭税が徴收されていた。算賦は成年男女を対象とした人頭税で十五歳以上五十六歳以下の者から年額百二十錢を徴收するもので、別に口算ともよばれた。これに對して口賦は未成年者の人頭税で七歳以上十四歳以下の者から年間二十三錢を徴收するものであつた。したがって人頭税を課徴する場合には、各個人の年齢が何にもまして重要であつたことはいふまでもない。從來の居延漢簡の研究の結果、漢代には一定の年齢層を示す特別の呼稱のあつたことが明らかにされた。それによると十五歳以上の男女を「大男」「大女」と呼び、七歳以上十四歳以下の男女を「使男」「使女」と呼び、六歳以下の男女を「未使男」「未使女」と呼んでいた。また十五歳以上の「大男」「大女」に對して十四歳以下の者を「小男」「小女」と呼ぶ場合もあつた。一例を示すと、

妻大女職年卅五

簡8 第五階卒徐誼

子使女侍年九

見署用穀五石三斗一升少

(二〇三・三)

圖二二三
活二七五

二七五二

子未使男有年三

簡9 永光四年正月己酉

妻大女昭武萬歲里□□年卅二

子大男輔年十九歲

豪陀吞胡階長張彭祖符

子小男廣宗年十二歲

(二九・二)

圖六〇 一二七四
活一六八 二一七八

子小女女足年九歲

輔妻南來年十五歲 皆黑色

とあるのがそれである。簡8は卒家屬廩名籍、簡9は符券すなわちパスポートである。これらの呼稱の別がいずれも前記人頭税の負擔と密接な關係にあったことは明らかであろう。そこで今、徐宗簡を見ると、家族を記して「妻」「子男」「男同產」「女同產」のように區別している。しかし子男とは

簡10 □該年五十三名詣府 子男禮強年十五

(一四〇・一九)

圖四一六
活四七四

六六〇四

とある子男がまさにその例で、單に男の子という意味にすぎない。前節で徐宗簡の簡2の釋文において第五段目Eの「男子一人」の記載を以て第三段目Cの「子男一人」の習書とみたのは、實はこのためである。同様に男同產とは同母兄弟を、女同產とは同母姉妹を指す名稱にすぎない。したがって、徐宗簡に見られる家族の記載は、徐宗を中心とする家族構成員の續柄と性別が記されているだけあって、年齢は全く記されていないのである。この點、米田賢次郎氏の批判^⑧もあるように、徐宗簡の家族の記載が人頭税のためのものであるとは、とうてい考えられない。また徐宗簡を簡2でいえば、平中氏は第三段目の家族は十五歳以上で口算の對象となるものを、第六段目の家族は、そのほかに十四歳以下の口錢の對象となるものを加えてあげたものであるとされた。しかし、既に述べたように第六段は明らかに後筆にかかるものであり、そうなる^⑨と氏の説明も白紙にかえして検討すべきことになる。また假りにこの下段の家族の記載を後の書き入れと

すると、上段の子男一人の時點から更に子男一人と子女二人のふえた時點まで記録を改訂せずに放置しておいたことになり、帳簿行政の非常に發達した漢代では甚だ理解にくるしむものである。このような觀點からも、下段すなわち第六段目の家族の記載は正式文書の一部をなすものではなく、既に述べたように上段の習書とみるべきである。したがって以上を綜合すると、徐宗簡に見える家族の記載は、人頭税の徴收とは何の關係もないといわざるを得ない。

では(三)禮忠簡に家族の記載がないのは彼の官職により人頭税が免除されたためであつたのか。すなわち平中氏によれば候長は百石の有秩の軍吏で、彼および彼の家族は口算が免除されていたであらうとされた。漢代、官吏に關係のある税役免除の規定として有名なのは『漢書』惠帝紀に見える次の詔である。

今吏六百石以上父母妻子與同居、及故吏嘗佩將軍都尉印將兵、及佩二千石官印者、家唯給軍賦、他無有所與。

これは惠帝が即位のときに官吏を優遇するための措置として發布した詔令である。ところでこの詔令については從來から多くの解釋が行われてきたが、近年では平中氏と楠山氏の對立する解釋が發表されている。先づ平中氏は「漢代の官吏の家族の復除と「軍賦」の負擔」の中で、「今、吏の六百石以上なるものの父母妻子と同居、及び故の吏の嘗て將軍・都尉の印を佩びて兵を將いしもの、及び二千石の官の印を佩びし者の家は、唯だ軍賦を給せしめて、他は與るところ有ること無からしめん」と讀み、およそ六百石以上の官吏の父母妻子と同居親族、及び官吏の前歴のある者で將軍や都尉となつて士卒を將領した者や二千石の官吏に任ぜられた者の家族は、軍賦だけを出して他の一切の税役を免除するの意に解された。これに對して楠山氏は、「更賦と軍賦」において、先の詔令の最初の部分を「今、六百石以上にして、父母妻子の（之と）ともに同居するもの」と讀み、「六百石以上の俸祿を受けている官吏で、家族（父母妻子）と同居しているもの」と解すべきであるとし、「惠帝紀の詔令は、官吏、元官吏の義務免除の規定である」とされた。この點、平中氏が惠帝紀の詔令を以て官吏を對象としたものではなく、彼らの家族を對象とした税役免除の規定であるとするのと眞向うから對立する。今、兩氏の解釋をみるに、平中氏の場合は「同居」を家族稱呼として名詞と解するのであるが、氏も述べておられる

ように當時の「同居」にそのような用例が全くない點やはり無理があるようであり、また楠山氏のように、この詔令をすべて官吏ないし元官吏のみの税役免除の規定であると解するのも問題があるように思われる。思うにこの詔は「今、吏の六百石以上の父母妻子にして、(之と)ともに同居するもの、及び故の吏の嘗て將軍・都尉の印を佩びて兵を將いしもの、及び二千石の官の印を佩びし者は、家ごとに唯だ軍賦を給し、他は與るところ有る無し」と訓讀し、その意味する内容は、今より六百石以上の官吏の父母妻子で吏と同居している者、及び嘗て將軍や都尉となり其の印を帶びて士卒を將領した者、また嘗て二千石の官吏となつて其の印を帶びた者は、それぞれの家で軍賦だけを負擔させて、その他はいっさい税役を免除し、これに關與することがないようにさせる、ということである。すなわちこの詔は、いわば税役免除の範圍を擴大したもので、元來、現任官には税役が免除されていたものを、新らしく官吏優遇措置として六百名以上の官吏の同居している父母妻子とか、また嘗て將軍・都尉となつた者とか、或はまた二千石の官にあつた故吏にまでその適用範圍を擴大したものにほかならない。ここで故吏にまで税役が免除されたということは、現任官は當然免除されていたことが前提となつており、逆にその前提をふまえてはじめて理解されるものである。私見よりすれば、この詔令により官吏優遇措置として現任の官吏については本人のほかに六百石以上の官吏の同居している父母妻子、元官吏については將軍・都尉・二千石の官に任ぜられた者が税役免除の適用をうけることになつたと考える。

ところで惠帝紀の詔で今一つ問題となるものは、「家唯給軍賦、他無有所與」とある「軍賦」の解釋である。從來よりこの軍賦についてもいくつかの説があり、たとえばこれを人頭税としての算賦と解するものとか、或は兵役に服する義務と解するもの、或はまた軍事上必要とされる租税一般と解するなどは、その代表的なものである。平中氏によれば、氏は如淳の説にしたがい、漢代「邊戍三日の徭戍は天下一般の民丁がすべて負擔しなければならぬ義務とせられ、その免役錢たる更賦を納めない限り宰相の子といえども之を免れることができなかった」ものであり、「惠帝紀の此の詔令に「軍賦」とあるのは恐らく「更賦」の誤字と認めるべきであらう」とされた。これに對して楠山氏は「軍賦」は「軍」と「賦」で

あり、「軍」とは兵役従事の義務、「賦」とは算賦を主とする軍事費供出の義務を指すという新説を發表された。平中氏の場合、従来の軍賦に關する諸説を批判して軍賦＝更賦説を提唱されたわけであるが、しかし楠山氏の反論にもあるように、漢代の更賦については如淳説を否定して服虔説をとる濱口重國氏の有力な説があるにもかかわらず、これに言及されていない點、氏自身の説得力を弱めていることは否定できない。しかしそれにもまして問題なのは「軍賦」を「更賦」の誤寫として理解されている點であらう。「軍賦」で意味が通じないならばともかく、「軍賦」はやはりそのまま「軍賦」として解釋すべきで、輕がるしく改めるべきではないと考える。これに對して楠山氏の「軍・賦」説は卓見である。軍賦の算賦説にしろ、兵役説にしろ、また軍事費賦課説にしろ、いずれも軍賦の一面ないしは一部分しかとらえられておらず、しかもそれらを以て軍賦のすべてだとするために今一つの説得力を缺いていた。楠山氏はこれらをすべて包括する形において軍賦を解釋されたわけである。氏の「賦」の解釋、とくに女子算賦不課説などについては尚問題の残るところであるが、この「軍賦」の解釋は有力な説として承認されるであらう。

以上、『漢書』惠帝紀の詔令を中心に漢代官吏とその家族の稅役免除について述べてきたが、私の理解するところでは、現任官および現任官で六百石以上の者については同居している父母妻子と、また元官吏では將軍・都尉と二千石以上の官に任ぜられた者は、それぞれに課せられた兵役義務と算賦（口算）などの軍事費供出の義務以外の、一切の稅役は免除されたのである。若しこの解釋が認められるならば、先の禮忠簡に家族の記載がないのを口算が免除されていただろうと解釋された平中氏の説は成り立たないことになる。すなわち官吏の家族で稅役免除の對象となるのは六百石以上の場合であるのに、候長といえども百石の少吏にすぎず、また假りに免除の對象となったとしても、算賦（口算）は例外とされていたからである。したがって禮忠簡の家族の記載の免除を官吏の家族の特典として、具體的には家族に算賦（口算）免除の特典があったとして考えることはできない。平中氏の上述の解釋は、禮忠簡と徐宗簡とを對比し、兩者と同一範疇のもとにとらえようとされたところから來ている。しかし以上(一)(二)(三)の諸點からの検討でも明らかなように、本來兩者は別

個の文書であり、兩者を同一性格のものとして取扱うことには大きな無理があるといわざるを得ない。

次に四いいわゆる算賦という中に貲算と口算が含まれるかどうかという問題である。平中氏の、算賦は貲算と口算の總稱であるとする説に對して、楠山氏は算賦は賦すなわち兵役義務に由來する人頭税(口算)であつて、貲算はこの中に含まれないとする。漢代に賦と税との區別があつたと主張するのは宮崎市定氏である。氏は「古代中國賦税制度」において、賦は平民に對する兵役を免除する代償として徴發されたもので、これが後には人頭税となつていったことを論證された。そして賦がその性質上、國家財政に屬し、軍事費として使用されたことも明らかにされているところである。漢代の人頭税たる口算は、まさに賦の典型というべきものであり、これを算賦——一算一二〇錢を單位として徴收される賦——と呼ぶことには異論はない。問題は貲算が果して算賦とよびうるかどうかという點にある。平中氏が貲算を算賦だとする根據は二點ある。一つは、口算も貲算も一算の定額一二〇錢を共通していたこと。二つにはその證據として禮忠簡の「大婢一人二萬」の記事と漢書惠帝紀の應劭の注に引くところの漢律に「人出一算、算百二十錢、唯賣人與奴婢倍算」とある記事とを結びつけ、「漢の法律では賣人や奴婢に對しては特に二算の人頭税を課していたのであり、奴婢はその持主に屬する財物として之を二萬錢に評價して二算の税額を持主から徴することになつてゐた」とみる。しかし後者に關していえば、大婢の價格が二萬錢だからといって、それを直ちに漢律にいうところの人頭税としての倍算に結びつけることには疑問があり、またこの場合は大婢すなわち成人女子奴隸であるが、成人男子奴隸たる大奴の場合も果して二萬錢であつたのかという楠山氏の疑問も首肯されるところである。と同時に、たとえ一算の額が共通であつても、貲算が口算と同様に果して賦と呼びうるものであつたかどうかは尙疑問である。私見よりすれば、漢代の賦の大宗は兵役免除の代償たる人頭税であるが、それから派生した軍事費負擔も賦に入れてよい。平中氏は武帝の元狩四年の商工業者に對する算緡・算車・算船が、抑商重農の意圖と同時に軍費補給の目的をもつていたことから、これを賦とみなし、廣く貲算一般を賦と解釋されたようである。しかし注意しなければならないのは、これはあくまでも武帝期の特殊事情によるものであつたということであ

る。漢代の貲算が本來的に賦たる性格をもっていたかどうかは、更に検討を加える必要があろう。

最後に(五)禮忠簡・徐宗簡が算賦の簿録もしくは申告書であったかどうかという問題である。漢代の税制において占租とよばれる申告納税制が行われていたことは既に平中氏の明らかにされたところであり、氏の大きな功績であるが、問題はこの兩簡が果してそのような申告書の類であったかどうかという點にある。先ず徐宗簡である。ここには三塢隊長徐宗の名のもとに、家族構成員および田宅など財産の數とそれぞれの價格が記されている。しかし既に述べたように家族の記録を口算の申告とみるには課税基準たる年齢別の記載がなく、また財産の記録を貲算の申告とみるには總額の記載がなく、いずれにしてもただ單に家族構成員と財産を列擧しているに過ぎない。したがってこれを以て口算・貲算の申告書とみることはできず、ましてその簿録の斷片とも考えられない。既にみてきたように徐宗簡はその簡番號二四・一からして甲渠候官のおかれていた破城子出土であることが知られるが、徐宗簡は恐らくは候官單位でまとめられた所轄の吏卒に關する身上書の一つもしくは一型式であつたとみるべきであらう。次に禮忠簡であるが、禮忠の名の下に所有する財産の品目と數量並に價格をあげ、最後に總計を出して結んでいる點、ここにあげられた財産が禮忠の全財産であり、これを以て財産税の申告書とみることは一應は可能であるかもしれない。しかしここで考慮しなければならないのは禮忠簡の出土地の問題である。禮忠簡の簡番號三七・三五によつて擬せられる地點は地灣すなわち肩水候官の地である。また禮忠の本籍地は肩水候官からおよそ六百漢里はなれた張掖郡下の饒得縣廣昌里で、簡札に列擧された財産は、彼の本籍地におけるものであつたことはまちがいない。とすれば、米田賢次郎氏の批判にもあるように、家長たる禮忠に財産申告の義務はあるにしても、實際に彼が申告し納税すべきところは民治機關たる饒得縣ではなかつたかと疑われる。すなわち、その書式や内容はともかくとして、もしそれが眞に財産税の申告書であつたとするならば、それが發見されるのは民治機關たる饒得縣治ないしは張掖郡治の遺址からであつて、禮忠簡が軍の前線基地たる肩水候官の遺址から出土したことは、かえつて禮忠簡がそのような申告書の類ではないことを裏書きするものといえるであらう。

またこれと關連することであるが、平中氏は簿檢の中に

簡11 建昭四年正月盡

三月四時

(二二四・二二A、B) 圖四七三、四七四 七五二七、七五四三
活五〇一

簿算

簡12 建昭元年十月盡二年九月

大司農部丞簿錄簿

(八二・一八B) 圖三一六 五二六〇
活四九七

算

とあるのを、いずれも算簿すなわち算賦に關する帳簿と解された。なるほど簡12の場合には、「大司農」とあり「算」とあり「算」は算賦と解せられるようではあるが、しかし漢簡の用例をみるに「算」一字でもって貲算・口算、算賦と解するものは一つもない。

簡13 甲渠候鄣

大黃力十石弩一右深強一分負一算 一塢上望火頭三不見所望負三算

八石具弩一右須去負一算

塢上望火頭二不見所望負二算

六石具弩一空上蜚負一算

□扣弦一脫負二算

六石具弩一衣不上負一算

凡負十一算

(八二・一五) (五二・一七)

圖一九〇 三七三八
活一九六 甲三六二

これは漢簡に見られる「算」の用法を示す一例で、簡札の内容は甲渠候官の備品について、その整備狀況を檢閲した記録である。この場合の「算」は一種の評價の單位で、たとえば負一算とは減點一點の意であって、決して貲算・口算、算賦を意味する「算」ではない。したがってここにいる「算簿」とは定期的に行われる檢閲の評價簿、いわば減點簿の可能性もあり、「算」とあるからといってにわかに算賦の簿録とは斷定できない。このように見てくると、禮忠簡を申告書とみるのは勿論のこと、算賦の簿録の斷片とみることも問題となってくる。私見よりすれば、禮忠簡も貲算の申告書や算賦の簿

録の断片ではなく、むしろ邊境兵士の身上調査書の一つとしての禮忠に關する財産記録とみるのが穩當のように思われる。

羅布淖爾出土の漢代木簡の中に

簡14 □里公乘史隆家屬畜產衣物籍^⑤

というのがあるが、徐宗簡・禮忠簡ともにおのその類型と考えられる。

五

以上、禮忠簡と徐宗簡について、先づ圖版による釋文および簡札の形狀等の検討から出發して、その書式とか内容にわたり、口算の問題、官吏とその家族の稅役免除の問題、算賦の問題、申告や算簿の問題などについて、疑問點を提示しながら私見をのべてきた。そして兩簡を以て口算・費算をふくむ算賦の申告書と解された平中荅次氏の從來の見解を否定して、いずれも邊境吏卒の身上書的一種であると考へた。平中氏がこの兩簡をよりどころとして從來から疑問の多かった漢代財産稅制度を究明されたのは、大きな功績であつた。しかしながら取り上げられた兩簡の解釋ならびに性格については修正を加へるべきだと考へる。誤解を生じた原因は、一つには徐宗簡に關する勞氏の釋文をすべて本文書としてとられたこと、二つには禮忠簡・徐宗簡とともに同一性格の文書、すなわち算賦の申告書として理解されたことにある。私見よりすれば、むしろ軍吏の名籍(名簿)にもその用途によつていくつかの種類があつたとする陳槃氏の説をとりた。

最後に禮忠簡と徐宗簡の年代について一言しておく。原簡に付された上番號は梱包番號で同時に出土地點を示すものであるが、漢簡では同一上番號の他の紀年簡によつて全體の年代を推定することが行われている^⑥。それによれば、先づ禮忠簡三七・三五は同一上番號の他の紀年簡、すなわち三七・四〇で元鳳四年(前七七)、三七・一八で元鳳六年(前七五)、三七・五六で元康(前六五—前六二)、三七・五〇で五鳳元年(前五七)、三七・五一および三七・二六で甘露二年(前五二)、三七・三九で初元四年(前四五)、三七・四五で初元五年(前四四)の年代が與えられ、綜合すれば元鳳四年(前七

七)から初元五年(前四四)まで頃のものととなる。同様に徐宗簡二四・一は同一上番號の他の紀年簡二四・一五によって五鳳二年(前五六)の年代が與えられる。したがって兩簡ともにおよそ宣帝期(前七四—前四九)頃のものとみて誤りはないなからう。

文中、疑問點のみ多く出し、また私自身誤解しているところがあるかもしれない。叱正を乞うしだいである。

註

① 居延漢簡の發見から公刊にいたるまでの經過並に居延の土地がらについては森鹿三「居延漢簡研究序説」(東洋史研究一二—三、一九五三)に詳しく、また公刊された資料、および研究論文については大庭脩「簡牘研究文獻目錄」(史泉二二、一九六一)によくまとめられている。

② 本文中に引用した木簡には(二四・一B) ^{國二二〇 活四六三甲 一八一B} 四〇八五のように數字を付しているが、最初の()内の數字は原簡につけられた簡の整理番號、圖二二〇は勞榘「居延漢簡圖版之部」(中央研究院歷史語言研究所專刊之二十一、一九五七)の頁數、四〇八五は勞榘「居延漢簡考釋之部」(同研究所專刊之四十、一九六〇)の一連簡番號、活四六三は勞榘「居延漢簡考釋釋文之部」(上海商務印書館、一九四九)の頁數、甲一八一Bは中國科學院考古研究所「居延漢簡甲編」(考古學專刊乙之八、一九五九)の圖版番號をそれぞれ指す。以下すべてこれに準ずる。

③ 大陸雜誌二一八、一九五一。陳氏の引用する釋文もすべて簡1、簡2と同じである。

④ 古代學三一、一九五四。本稿の作成に當つては、氏の批判

に多くの示唆を得た。

⑤ 集刊東洋學一八、一九六七。

⑥ 名古屋大學文學部論集第五史學第二、一九五三。同『漢代社會經濟史研究』所收。

⑦ 和歌山縣高等學校社會科研究協會會報二二、一九六八。

⑧ 注①森論文を參照。

⑨ 林巳奈夫「後漢時代の馬車」(考古學雜誌四九—三・四、一九六四)を參照。

⑩ 本文挿圖では今少し不鮮明で濃淡がはっきりしないが、『居延漢簡圖版之部』では明らかに區別しうる。

⑪ 藤枝晃「釋「見署用殺」ほか——『長城のまもり』訂誤——」(東洋史研究一四—一・二合刊號、一九五五)に勞榘氏訪日の際の説明として記録されている。

⑫ 藤枝晃「長城のまもり——河西地方出土の漢代木簡の内容の概略——」(自然と文化別編Ⅱ所收、一九五五)を參照。

⑬ 森鹿三「居延漢簡とくにウラン・ドルベルジン出土簡について」(史林四四—三、一九六二)を參照。

⑭ 拙稿「居延漢簡燉燉考——とくに甲渠候官を中心として——」

(東方學報京都三六、一九六四)を参照。

⑮ 居延漢簡には三・四とか三・六のように上下二つの整理番號がつけられている。この整理番號がどのような過程のもとに誰によってつけられたものか、今日では十分に明らかではないが、ただ上下二種類の番號のうち上番號は梱包番號で出土地ごとにまとめられたものであり、下番號は同一梱包内の木簡を適宜順序づけたものであるとされている。したがって同じ上番號をもつものは同一地點から出土したものであることは、漢簡研究者の異論のないところである。そのため木簡の年代についても、同一上番號内の有紀年簡によって、そのグループ全體の年代を推定することが可能となってくる。先ず上番號三の年代の上限は三・八の簡で五鳳三年(前五五)、下限は三・三〇の簡で綏和二年(前七)の年代が與えられ、同様に上番號二四の年代の上限は二四・九七で初元五年(前四四)、下限は二四・一三二で元延三年(前一〇)、上番號二三五の上限は三・五・二七で竟寧元年(前三三)、下限は三・五・七で河平元年(前二八)、上番號三一七の上限は三一・七・三で建昭元年(前三八)、下限は三一・七・二二で陽朔四年(前二二)となる。以上を綜合すると、上番號二四、一三五、三一七ともにその年代の幅は全て上番號三の前五五年く前七年の中に包括された近似性を示している。また後述するようにいわゆる徐宗簡は五鳳二年(前五六)前後のものと推測され、これからしても居延漢簡中の徐宗は同一人物である可能性が非常に大きい。

⑯ 前掲楠山論文を参照。尙、徐宗簡の場合、一部損傷し、また全體として完全な文書であったかどうか疑問で、總計の記載

がないとは斷定できない。しかし今假りに資産に總計がつけば、上段の戸口にも何らかのトータルが必要とされるが、この文書の形式からいって、そのようなものが付けられたとは考えられない。

⑰ 拙稿「漢代人頭税の崩壊過程―特に算賦を中心として―」(東洋史研究一八四、一九六〇)を参照。

⑱ 注⑫藤枝論文を参照。

⑲ 前掲米田論文を参照。

⑳ 立命館文學一二七、一九六〇。同「中國古代の田制と税法」所收。

㉑ 和歌山縣立海南高等學校研究報告二、一九六八。

㉒ 軍賦を算賦すなわち人頭税と解するのは加藤繁「算賦についての小研究」(史林四一四、一九一九。同「支那經濟史考證上」所收)があり、兵役義務と解するものには宮崎市定「古代中國賦税制度」(史林一八一・二・三・四、一九三三。同「アジア史研究第一」所收)があり、軍事上必要な租税一般と解するものに吉田虎雄「兩漢租税の研究」(大阪屋書店、一九四二)等がある。

㉓ 濱口重國「錢更と過更―如淳説の批判―」、東洋學報一九一三、一九三一。「同補遺」同二〇一二、一九三三。同「秦漢隋唐史の研究上」所收。

㉔ 注㉒を参照。

㉕ 黃文弼「羅布渾爾攷古記」(中國科學考察團叢刊之一、一九四八)木簡第二七。注⑫藤枝論文を参照。

㉖ 注⑮を参照。